

家庭背景別にみた学校行事の教育的意義

—— 体育大会を事例に ——

Difference of Educational Significance of School Events by Social Stratification

—— Case of School Sports Day ——

長谷川 祐 介

Yusuke HASEGAWA

本稿の目的は、公立中学校の生徒を対象にした質問紙調査のデータを用いた分析に基づいて、体育大会を事例に家庭背景（具体的には文化的階層）による学校行事の教育的意義について考察することである。分析は文化的階層別にみた学校行事への取り組みの相違、生徒の自己概念に及ぼす影響の相違を検討した。その結果、第1に中学生全体では多くの生徒は体育大会に一生懸命取り組み、楽しい活動であったと振り返っていたものの、文化的階層が下位の生徒は効用感が低いことが明らかとなった。第2に自己概念に及ぼす体育大会効用感の影響力について文化的階層別でみたとき、自己有能感や社交性は文化的階層が下位の生徒たちにおいて体育大会効用感が正の影響を及ぼしていた一方、勤勉性については上位の生徒たちにおいて正の影響を及ぼしていたことが明らかとなった。

1. 問題の所在

本稿の目的は、公立中学校の生徒を対象にした質問紙調査のデータを用いた分析に基づいて、体育大会を事例に家庭背景（具体的には文化的階層）による学校行事の教育的意義について考察することである。分析は文化的階層別にみた学校行事への取り組みの相違、生徒の自己概念に及ぼす影響の相違を検討する¹⁾。

近年の教育改革は、学校行事のあり方に再考を促している。特に学校週5日制がもたらした影響は大きく、学校行事実施のために確保されていた時間が短縮され（藤田 2005）、従来の活動内容を実施することが難しくなっていることが指摘される。また近年、書類作成など直接授業等の教育活動と関連のない活動が増加したことがつとに指摘されている。これらに加え学力重視の政策がすすめられることにより、教科に関する授業時間の確保や増加が要請されることとなった。今後ますます学校行事が縮小、または創意工夫する余裕を失い形骸化する恐れがある。戦前からの歴史がある学校行事といえどもそのあり方が問われることは避けられない。このような状況であるからこそ学校行事が当

事者である生徒たちにとってどのような教育的意義があるのか、実証的な分析に基づいて検討することは不可欠な作業である。

学校行事に関する先行研究は大きく2つに分類できる。1つ目は学校行事を対象とした歴史的な研究である。例えば吉見（1999）は、戦前の運動会が近代国家に求められる身体の育成機会であると同時に、地域の村祭りとしても存立していたことを明らかにしている。また平田（1999）は戦前の社会状況との関連の中で、運動会の目的や内容の変化を分析している。さらに柳（2005）は運動会のような競争性を有する活動が学級成員間の一体感を高める上で貢献していたことを明らかにした。

2つ目は現在の学校行事の教育的・社会的機能を社会的観点から明らかにしようとする研究である。山田（1999）が指摘しているように、近年エスノグラフィの手法を用いて学校行事の機能を明らかにする研究が散見されるようになった。例えば山田（2000）は中学校の体育大会や合唱コンクールのエスノグラフィをもとに、学校行事の機能を明らかにしようとした。その結果、学校行事が生徒の学校におけるアイデン

ティティ再編の契機になっていることなどを明らかにした。

上記の先行研究より本稿は社会学的観点に基づく研究として位置づけ、中学校の体育大会を事例にした分析をもとに、現在の学校行事の教育的意義について検討する。分析は大きく次の2点について行う。

第1は家庭背景²⁾、具体的には家庭の文化資本の多寡によって分類される文化的階層別の学校行事への取り組みの相違を分析する。公立中学校の生徒の家庭背景は多様である。機会平等を重視する今日の社会では家庭背景にかかわらず等しく学校内外の教育機会が提供されなければならない。しかし生徒文化研究において明らかなどおり、学校に適應している生徒の多くは親の学歴が高い(竹内 1993)。一般に親の学歴が高い生徒ほど学業成績が高い傾向にあるため、教科の授業など学業成績に関連する活動を中心に展開されている学校に適應しやすいためだろう。

一方、学校行事のような教科外活動は、直接的に学業成績と関係のない活動である。そのため親の学歴が低い生徒だからといって学校行事への取り組みが消極的とは断言できない。学校行事への取り組みに親の学歴によって違いはないと予想されるのだが、この点について実証的に分析を行った研究はない。本稿では調査対象校の要望により直接親の学歴を尋ねる質問項目を設けなかったため、代替変数として文化的階層を分析に用いる。学歴同様、文化的階層は家庭背景を測る指標であり、今回の分析に用いる意義は見出される。

第1と関連して、第2は文化的階層別で学校行事を通して獲得した効用感の自己概念に及ぼす影響に違いがあるのか分析する。教育機会の平等を重視する現在の学校教育では、生徒の家庭背景(具体的には文化的階層)に関係なく、生徒に及ぼす学校行事の成果のあり方も同じと期待される。本稿では学校行事の成果変数として自己概念³⁾に着目する。その理由は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、…人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」という学習指導要領における特別活動の目標から分かるとおり、肯定的な自己概念の形成に特別活動が重要な役割を期待されているからである(鈎2000, 23頁)。このような分析はこれまで行われておらず、本稿において分析する意義は見出される。

以上の分析の結果をもとに本稿では現在の学校行事の教育的意義について考察する。

2. 調査

2.1. 調査対象者

今回の調査対象はP中学校(以下、P中)に在籍する中学生(1~3年)である。今回、1つの中学のみのデータで分析を行うため学校間の相違などは検討できない。しかし調査対象校のP中は中国地方の県庁所在地(X市)の都市部に立地し、通学する生徒たちの家庭背景は多様である⁴⁾。またクラス数18で生徒数600名以上の大規模校であり、分析を行う上で十分なデータを確保できている。これらの点から今回の分析にP中のデータを用いることは十分に意義があると考えられる。

2.2. 調査手続き

調査は2006年2月に、クラス別の集合自記式で実施した。有効回答者数は539名であった(表1)。

なお分析に用いた項目の概要は分析結果において随時、取り上げることとする。

表1 調査対象者

学 年	1 年 生	2 年 生	3 年 生	合 計
	178人 33.0%	174人 32.3%	187人 34.7%	539人 100.0%
性 別	男 性	女 性	合 計	
	283人 52.6%	255人 47.4%	538人 100.0%	

3. 分析結果

3.1. 文化的階層別にみた体育大会への取り組み

3.1.1 P中の体育大会

本調査が対象とするP中では長年、体育大会が実施されてこなかったが、調査時の3年前より体育大会が再び実施されるようになった。調査当時、P中では2学期のはじめころに体育大会を実施している。

P中では、約1ヶ月前から体育の授業を中心に体育大会の準備・練習が行われる。当日に近づくにつれ、学年全体、さらには全校生徒で練習が実施されている。当日に近づくると生徒たちは自主的に昼休憩の時間等を

表2 体育大会への取り組み、効用感、満足感に関する単純集計結果

		とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計
1	私は体育大会の練習にいっしょうけんめい取り組んだ	46.4	36.3	12.4	4.9	100.0 (534)
2	私は体育大会の本番にいっしょうけんめい取り組んだ	57.7	30.3	8.1	3.9	100.0 (532)
3	私は体育大会でかつやくすることができたと思う	18.4	31.1	38.4	12.2	100.0 (534)
4	体育大会を通してクラスがひとつにまとまった	29.4	38.9	23.6	8.1	100.0 (530)
5	体育大会を通して友人となかよくなれた	30.7	39.7	20.7	8.9	100.0 (527)
6	体育大会を通してみんなと協力することの大切さを学んだ	33.6	36.0	20.1	10.3	100.0 (533)
7	今年の体育大会は楽しかった	35.0	36.5	18.7	9.7	100.0 (534)

※ 数値は%、()内は人数。

表3 体育大会に対する意見に関する単純集計結果

		とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計
1	体育大会の練習時間は短かったと思う	23.8	29.1	34.5	12.6	100.0 (533)
2	参加したくない種目があった	21.3	22.2	31.0	25.5	100.0 (526)

※ 数値は%、()内は人数。

利用して練習を実施していた。

体育大会のプログラムは生徒が実施する種目を中心に編成されている。学級間対抗の競争を中心に体育大会が実施されている。

3.1.2 体育大会への取り組みや意識の実態²⁾

体育大会に対する生徒の取り組みに関する項目の単純集計結果が表2である。たとえば「私は体育大会の練習にいっしょうけんめい取り組んだ」において「とてもあてはまる」が46.4%、「ややあてはまる」が36.3%となっていることから分かります。多くの生徒は体育大会に積極的に取り組んでいた。項目4から6はいずれも「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の合計が70%前後であった。多くの生徒は体育大会がクラスの凝集性を高める上で効果があり、また体育大会を通し友人と仲良くなり、協力の大切さを学んだと考えていた。項目7では「とてもあてはまる」が35.0%、「ややあてはまる」が36.5%となっており、多くの生徒が体育大会は非常に楽しい行事であった満足していた。

しかし表3の項目1「体育大会の練習時間は短かったと思う」において「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の合計が50%強、「参加したくない種目があ

表4 文化的階層別にみた学業成績平均値

		学業成績 (現在)
文化的階層	文化階層上	2.91 **
	文化階層中	2.91
	文化階層下	2.61

※ 数値は学業成績(5件法)の平均値
 ※ 有意差検定は一定配置分散分析の結果に基づく
 ※ ***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05

った」の「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の合計が40%強存在したことから分かるように学校行事に何かしらの不満を持っている生徒も一定数存在した。

3.3.3 文化的階層別にみた体育大会への取り組み

次に体育大会と文化的階層との関連について検討したい。今回は中学校生活に関する調査であり、学力テストなどの結果については直接測定していない。代替指標として学業成績に関する自己評価(5段階)を用いることとする。一元配置分散分析を行い、文化的階層別にみた学業成績平均値の差の検定を行った。その結果、文化的階層下位の生徒の学業成績の平均値(2.61)は上位の平均値(2.91)や中位の平均値(2.91)と比べて有意に低くなっていた(表4)。

表5は文化的階層と体育大会への取り組みに関する項目のクロス集計結果である。X²検定を行った結果、

表5 文化的階層別にみた体育大会への取り組み

		私は体育大会の練習にいろいろけんめい取り組んだ	私は体育大会の本番にいろいろけんめい取り組んだ	私は体育大会でかつやくができたと思う	体育大会を通してクラスがひとつにまとまった	体育大会を友人となかよくなれた	体育大会を通してみんなと協力することの大切さを学んだ	今年の体育大会は楽しかった
文化的階層	文化階層上	84.2	89.4	56.1*	72.2	72.5*	71.9**	72.5**
	文化階層中	84.8	91.2	49.7	69.8	74.6	76.5	80.7
	文化階層下	79.5	83.5	41.5	63.2	62.4	60.8	62.0

※ 数値は体育大会への取り組みに関する各項目において「あてはまる」を選択した者の%

※ 有意差検定は χ^2 検定の結果に基づく

※ *** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

表6 自己概念に関する因子分析結果

	自己有能感	社交性	勤勉性	因子4	因子5
たいていのことはうまくこなすことができる	0.74	0.15	-0.06	-0.09	0.04
自分には人よりすぐれたところがある	0.72	0.01	-0.10	-0.03	-0.06
学校の勉強には自信を持っている	0.44	-0.17	0.16	0.04	0.00
私は人に頼らず、自分でいろいろなことができる	0.40	0.02	0.25	-0.02	0.01
私は友だちとなかよくなることができる	-0.16	0.65	0.06	-0.03	-0.03
私はまわりにいる人を楽しくさせることが上手だ	0.06	0.60	-0.18	0.11	0.05
みんなの前でもはっきりと自分の意見が言える	0.11	0.51	0.07	-0.03	0.04
やると決めたことは最後までやりとおす	-0.07	-0.04	0.79	-0.03	0.00
難しいことにおつかった時こそ、がんばるほうだ	0.14	-0.02	0.61	0.05	-0.03
親は私の気持ちをよくわかってきている	-0.09	0.03	-0.03	0.67	-0.18
私の気持ちをよくわかってきている先生がいる	0.03	0.07	0.05	0.56	0.12
学校でいやな思いをしたり、元気がなくなることがよくある	0.02	-0.06	-0.10	0.24	0.69
家出をしたと思ったことが何度もある	0.04	0.14	0.10	-0.25	0.46
親は私に大きな期待をかけている	0.29	-0.14	0.12	0.25	0.06
自分には、将来の夢や目標がある	-0.04	0.28	0.27	0.04	0.03
私は責任感があると思う	0.10	0.22	0.28	0.16	0.09
私はたよりない人間だ	-0.19	-0.05	0.03	-0.08	0.34
私はとてもしあわせだ	0.14	0.19	0.07	0.19	-0.27
因子寄与	3.48	3.21	2.93	2.16	1.45

※ 主因子法（プロマックス回転後の因子パターン）斜行回転を採用しているため、累積寄与率などは揭示していない。

※ 因子負荷量0.40以上を採用

文化的階層により体育大会効用感や満足感の違いがあり、総じて下位の生徒は「あてはまる」の割合が他と比べて有意に低かった（表5）。たとえば効用感では文化的階層が下位の生徒は「あてはまる」の割合が60.8%であるのに対し、上位は71.9%、中位は76.5%と効用感を獲得したと考える生徒の割合が低かった。

3.2. 自己概念に及ぼす体育大会の影響

このように体育大会への取り組みは文化的階層によって異なった。それゆえ文化的階層別に体育大会が生徒に及ぼす影響の現れ方が異なってくる可能性があり、その点について分析した。

3.2.1 自己概念に関する因子分析

本稿では、荻谷・志水（2004）を参考に設けた自己概念に関する項目を用いて因子分析を行った。分析の結果、5つの因子が抽出された（表6）。

第1因子は「たいていのことはうまくこなすことができる」「自分には人よりすぐれたところがある」など自分自身の能力に対する自信を示した項目の因子負荷量が高かったため「自己有能感」と命名した。

第2因子は「私は友だちとなかよくなることができる」「私はまわりにいる人を楽しくさせることが上手だ」など他者とのコミュニケーションを上手く出来る自信を示した項目の因子負荷量が高かったため、「社交性」と命名した。

第3因子は「やると決めたことは最後までやりとおす」「難しいことにはぶつかった時こそ、がんばるほうだ」などコツコツ努力し、何かをやりはじめたら最後までやり通すという気持ちを示した項目の因子負荷量が高かったので「勤勉性」と命名した。なお第4因子と第5因子は因子寄与の値が低いことなどを考慮して以下の分析では用いないこととした。

3.2.2 学校行事と自己概念の関連

自己概念と学校行事の取り組みや効用感との関連を分析するのだが、体育大会について表2にある変数をそのまま用いるのは煩雑となる。そこで主成分分析を行った結果、1つの主成分が抽出された。分析に用いた変数は体育大会の取り組み、効用感、満足感など多岐にわたるが、効用感に関する項目が多いことから、抽出された主成分を「体育大会効用感」と命名した。すなわちこの主成分の得点が高い者は体育大会を一生懸命取り組み、その結果、高い効用感（満足感を含む）を獲得したと解釈できる。なお参考までにクローンバツクの α 係数を算出した結果、主成分分析に用いた7変数の α 係数は0.918と非常に高い数値となっていた。この「体育大会効用感」という尺度は内的一貫性が高い。

表7 体育大会効用感と自己概念の関連

	自己有能感	社交性	勤勉性
体育大会効用感	0.385 ***	0.421 ***	0.420 ***

※ 数値はピアソンの相関係数

※ *** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

表7は体育大会効用感と自己概念に関する3つの因子それぞれの相関係数を算出した結果である。自己概念は体育大会効用感と有意な正の相関があった。具体的には自己有能感が $r=0.385$ 、社交性は $r=0.421$ 、勤勉性は $r=0.420$ （いずれも0.1%水準で有意）であった。

3.2.3 中学生の自己概念の規定に関する重回帰分析

自己概念の規定要因は体育大会効用感に限らない。一般に自己概念はこれまでの経験や環境によって形成される。そのため自己概念に及ぼす体育大会効用感の影響力を明らかにするためには、それ以外の要因を統制した上で体育大会効用感の影響を明らかにする必要がある。そこで自己概念を従属変数とした重回帰分析を行った。

今回、独立変数として大きく属性（性別、学年）、中学生生活⁶⁾、現在の学業成績、体育大会効用感の4つを用いることとした（表8）。

重回帰分析を行った結果が表9である。体育大会効用感は、自己有能感に対し $\beta=0.141$ ($p < 0.01$)、社交性に対し $\beta=0.159$ ($p < 0.01$)、勤勉性に対し $\beta=0.148$ ($p < 0.01$)とそれぞれ正の影響を及ぼした。

本稿の主たる関心はこれらの影響力が生徒の家庭背景、文化的階層に応じて異なるかどうかという点である。その点を検討した結果は表10である。

自己有能感については文化的階層が下位の生徒のみ体育大会効用感が有意な正の影響を及ぼしていた ($\beta=0.243$, $p < 0.05$)。社交性については文化的階層が中位の生徒においても有意な正の影響 ($\beta=0.306$,

表8 重回帰分析で用いる変数

	概念	変数名	変数の内容
従属変数	自己概念	自己有能感 社交性 勤勉性	因子得点
独立変数	性別	男性ダミー	男性=1, 女性=0のダミー変数
	学年	2年ダミー 3年ダミー	2年=1, その他の学年=0のダミー変数 3年=1, その他の学年=0のダミー変数
	中学生生活	学校適応 規律・学習重視 サブカルチャー重視	因子得点
	学業成績	学業成績・上ダミー（現在）	現在の学業成績（5段階）が「かなり上」「どちらかといえば上」=1, その他=0のダミー変数
		学業成績・下ダミー（現在）	現在の学業成績（5段階）が「かなり下」「どちらかといえば下」=1, その他=0のダミー変数
体育大会	体育大会効用感	主成分得点	

表9 自己概念の規定要因に関する重回帰分析結果

	自己有能感	社交性	勤勉性
男性ダミー	0.208 ***	0.150 **	0.133 **
2年ダミー	-0.135 **	-0.163 **	-0.010
3年ダミー	-0.125 *	-0.125 *	-0.041
学校適応	0.235 ***	0.273 ***	0.180 ***
規律・学習重視	0.164 **	0.156 **	0.250 ***
サブカルチャー重視	0.294 ***	0.387 ***	0.240 ***
学業成績・上ダミー（現在）	0.198 ***	0.059	0.146 **
学業成績・下ダミー（現在）	-0.089	-0.044	-0.109 *
体育大会効用感	0.141 **	0.159 **	0.148 **
F値	21.306 ***	22.698 ***	20.549 ***
adj R ²	0.308	0.322	0.300

※ 独立変数の係数は標準偏回帰係数（ β ）※ *** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

表10 文化的階層別にみた自己概念の規定要因に関する重回帰分析結果

	自己有能感			社交性		
	文化階層上	文化階層中	文化階層下	文化階層上	文化階層中	文化階層下
男性ダミー	0.291 **	0.054	0.307 ***	0.205 *	0.148	0.175 *
2年ダミー	-0.061	-0.198 *	-0.125	-0.088	-0.190 *	-0.184 *
3年ダミー	-0.107	-0.088	-0.152	-0.089	-0.054	-0.176
学校適応	0.218 *	0.216 *	0.199 *	0.291 **	0.300 ***	0.182 *
規律・学習重視	0.244 **	0.149	0.019	0.251 **	0.055	0.031
サブカルチャー重視	0.290 **	0.156	0.354 ***	0.357 ***	0.290 **	0.472 ***
学業成績・上ダミー（現在）	0.212 *	0.109	0.293 ***	-0.005	-0.028	0.202 *
学業成績・下ダミー（現在）	-0.047	-0.146	-0.070	-0.094	-0.025	0.005
体育大会効用感	0.080	0.169	0.243 *	0.025	0.306 **	0.262 *
F値	7.151 ***	5.121 ***	8.683 ***	6.749 ***	7.203 ***	8.860 ***
adj R ²	0.300	0.208	0.347	0.286	0.284	0.352

	勤勉性		
	文化階層上	文化階層中	文化階層下
男性ダミー	0.102	0.073	0.230 **
2年ダミー	0.047	-0.168	0.104
3年ダミー	-0.065	-0.080	0.078
学校適応	0.162	0.128	0.287 **
規律・学習重視	0.266 **	0.202 *	0.227 *
サブカルチャー重視	0.118	0.189 *	0.315 ***
学業成績・上ダミー（現在）	0.071	0.102	0.248 **
学業成績・下ダミー（現在）	-0.075	-0.218 *	-0.061
体育大会効用感	0.215 *	0.241 **	-0.018
F値	5.860 ***	7.846 ***	7.717 ***
adj R ²	0.253	0.304	0.317

※ 独立変数の係数は標準偏回帰係数（ β ）※ *** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

$p < 0.01$) を及ぼしていたが、下位の生徒においても有意な正の影響 ($\beta = 0.262$, $p < 0.05$) を及ぼしていた。

しかし勤勉性については文化的階層が下位の生徒の場合、体育大会効用感が有意な影響を及ぼしていな

った。体育大会効用感の影響があったのは、文化的階層が上位 ($\beta = 0.215$, $p < 0.05$) や中位の生徒 ($\beta = 0.241$, $p < 0.01$) だった。

4. まとめ

本稿では学校行事の教育的意義を明らかにするために、公立中学校の体育大会を事例に、体育大会への取り組み実態と自己概念に及ぼす影響力について検討した。生徒の家庭背景は多様であるという前提のもと家庭背景を示す変数として文化的階層を取り上げ、文化的階層別に体育大会への取り組みのあり方と自己概念に及ぼす影響力に違いがあるのか検討した。その結果、次の2点が明らかとなった。

第1に体育大会への取り組み状況である。中学生全体では体育大会の練習時間の短さやプログラム内容に不満を持つ生徒が半数程度いたものの、多くの生徒は体育大会に一生懸命取り組み、とても楽しい活動であったと振り返っていた。しかし文化的階層別にみると、文化的階層が下位の生徒は上位、中位と比べて効用感や満足感が低かった。

第2に自己概念に及ぼす体育大会効用感の影響である。中学生全体でみると、体育大会に一生懸命取り組み、その結果高い効用感を獲得することは、自己有能感を高め、さらに社交性や勤勉であるという自己概念を形成する上で影響力を有していた。しかし文化的階層別にみると、自己有能感や社交性は文化的階層が下位の生徒たちにおいて体育大会効用感が正の影響力を及ぼしていた一方、勤勉性については上位の生徒たちにおいて正の影響力があつた。

5. 考察

5.1. 学校行事への取り組みの状況について

分析結果より文化的階層が下位の生徒ほど体育大会の効用感や満足感は低い傾向にあつた。こうした傾向は学業成績でも同じで文化的階層が低い生徒ほど成績はよくなかつた。これらの結果をあわせて考えると、体育大会といえども学業と同じような価値や文化を持っており、文化的階層が中位や上位の生徒ほど親和的な活動となつていると推察される。

このことは特別活動研究に対して再考を迫るものである。学校行事の位置づけをめぐる理論的考察をレビューした山田(1999)によれば、学校行事は学校が生徒にとって居心地のよい「共同体」となるように、学力以外の能力を発揮する場を設けてさまざまな能力を

もつ生徒に活躍の場を提供するという「代償」としての役割が期待されている。しかし学業成績において比較的不利な立場にある文化的階層が下位の生徒たちは、学校行事においても優位もしくは他の文化的階層の生徒たちと比べて同じような立場にあるわけではない。そこでの効用感を得ることが少ない傾向にあつたのである。

日本の学校は学業成績に関連しないものも含め、多様な教育活動を提供している。しかし教育活動への参加構造については一元的である可能性が見出される。今後は部活動なども含めて教科外活動の参加の規定要因について検討し、家庭背景と教育活動の関連について検討することが必要だろう⁷⁾。

5.2. 自己概念に及ぼす影響力について

山田(1999)によれば、学校行事には教科学習では習得することが出来ない事柄を学ぶ「補完」としての役割がある。確かに今回の分析より、学校行事の1つである体育大会では教科指導と直接関連のない自己概念形成に一定の影響を及ぼしていたことが明らかになった。これは体育大会など学校行事の有する教育的意義と捉えることができるだろう。

しかし同じ学校行事を経験し一定の効用感を獲得したとしても、その結果形成される自己概念は家庭背景(具体的には文化的階層)によって異なつていた。学校行事において生徒共通の教育目標を設定したとしても、実は生徒個人の努力では変え難い家庭背景という要因によって、目標達成の内容が左右されるのである。つまり家庭背景によって学校行事の教育的意義が異なるのである。教育機会の平等という立場に基づけば、このような状況は憂慮すべき状況である。状況を改善するためには、いかなる対策が有効なのか。この実践課題に応えるために、質的な手法も併用したうえで分析の精緻化を行い、さらなる考察が求められる。

5.3. 今後の課題

最後に今後の課題について述べておく。

第1は学歴と文化的階層との関連である。先述のとおり、今回は親の学歴の代わりに文化的階層を変数として用いた。調査対象の協力を得て親の学歴を質問できた場合、親の学歴を用いて分析を行ったとしても同様の結果が導き出されたのか検討することが必要だろう。

第2は体育大会以外の学校行事について分析をすすめる必要がある。本稿は多様な学校行事の中でも体育大会のみを事例に分析、考察を行った。本稿の考察結果をさらに深めていくためには文化祭や合唱祭など他の学校行事についても同様の分析を行い、その結果と照らし合わせて考察することが求められる。

第3は学校間の相違、特に学校行事の活動内容の違いとそれがもたらす影響の相違について検討することであろう。今回は1つの公立中学校の事例とした調査データをもとに分析を行った。学校行事は学習指導要領によって定められた正課活動である。しかし実際は教科活動のように内容の詳細まで規定されているわけではない。学校行事を含む特別活動の学習指導要領をみれば分かるように、そこで記載されているのは大まかな内容と指導上の留意点を中心である。教科指導以上に学校行事には学校間の相違が大きく、各学校の創意工夫する余地が残されている。

近年、教育社会学の領域では「効果のある学校」研究が蓄積され始めている。この研究は学力向上について、それに成功している学校の特徴について計量分析を駆使し、さらに質的な分析も併用して明らかにしようとするものである（たとえば川口・前馬 2007）。学校間の相違が大きいと予想される学校行事など特別活動においても、同じような研究の試みが可能かもしれない。特別活動等の場合、教育成果が学力のように計量分析になじみが深くないかもしれない。しかし本稿のように教育成果として自己概念などを設定すれば計量分析の実施は可能であり研究の余地は大きいと思われる。

上記の課題を踏まえつつ、今後は学校行事など特別活動を通して教育成果を向上させている「効果的な学校」を明らかにする研究の試みが期待される。

注

- 1) 後述の通り、本稿は学校行事に関する研究のうち、社会学的観点に基づく研究として位置づけている。そのため論文構成、統計分析の方法や結果の提示の仕方などは主に社会学(特に教育社会学)に関する研究論文のスタイルを参考に執筆した。
- 2) 本稿では家庭背景を親の社会経済的地位など社会階層、親の行動様式等と捉えている。

- 3) 本稿では小嶋(1993)を参考に、自己概念を知識・技能・能力、態度や対人関係など自分について抱いている概念と捉えた。自己概念は教育社会学においても同和地区の学力問題などにおいて注目されてきた概念である(例えば池田 2000, 原田 2003)。
- 4) 調査対象校が特定される懸念があるため詳細な説明は行わないが、P中の校区には新興の住宅地が所在し、階層が高い者が在住する一方、生活保護を受ける世帯も多く住んでいる。
- 5) 学校行事に関する項目はP中学の体育大会に関する観察を通して作成した項目である。
- 6) 白松(1998)を参考に設けた中学校生活に関する質問項目32項目(4件法)を用いて因子分析を行った。なお因子分析の結果は付表として示しているので参照されたい。分析の結果、5つの因子が抽出された。第1因子は、「学校に通うことは楽しい」「自分の中学校のことが好きである」や「学校の授業は楽しい」「好きな先生が多い」など学校へのコミットメントを示す項目の因子負荷量が高かったため、「学校適応」と命名した。第2因子は、学校の校則はきちんと守っている」など学校の規律を遵守する項目や「学校の宿題はかならずする」など学習をまじめに取り組む項目の因子負荷量が高かったため「規律・学習重視」と命名した。第3因子は、「友だちといっしょに買い物によくでかける」「同じクラスの友達と遊びに行くことがよくある」「いつも流行の服装をするようにしている」など学校外のサブカルチャーへの傾倒を示す項目の因子負荷量が高かったため「サブカルチャー重視」と命名した。なお第4因子、第5因子は因子寄与率が低いことなどを考慮して、以下の分析では用いないこととした。
- 7) 西島ら(1999)は生徒の分化要因は学業成績以外にもあると考える「多元的学校文化モデル」を主張している。そのモデルを検証する上で、部活動を事例に研究を進めている(例えば藤田 2001)。しかし部活動参加の規定要因については詳細に検討されていない。

引用文献

- 池田寛, 2000, 『学力と自己概念』解放出版社.
- 荻谷剛彦, 2004, 「『学力』の階層差は拡大したか」荻谷剛彦・志水宏吉『学力の社会学』岩波書店, pp.127-152.
- 荻谷剛彦・志水宏吉, 2004, 『学力の社会学』岩波書店.
- 川口俊明・前馬優策, 2007, 「学力格差を縮小する学校—「効果のある学校」の経年分析に向けて—」『教育社会学研究』第80集, pp.187-205.
- 小嶋秀夫, 1993, 「自己概念」森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』有斐閣, pp.543.
- 白松賢, 1997, 「高等学校における部活動の効果に関する研究—学校の経営戦略の一視角—」『日本教育経営学会紀要』第39号, pp.74-88.
- 白松賢, 1998, 「高校生活の学校生活に関する社会学的研究—高校生の会話と部活動の関係を中心に—」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第44巻第1号, pp.189-194.
- 竹内清, 1993, 「生徒文化の社会学」木原孝博・武藤武典・熊谷一乗・藤田英典編著『学校文化の社会学』, 福村出版, pp.107-122.
- 西島央・藤田武志・矢野博之・荒川英央・羽田野慶子, 1999, 「中学校生活と部活動に関する社会学的研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第39巻, pp.137-163.
- 原田彰編著, 2003, 『学力問題へのアプローチ』多賀

出版.

- 平田宗史, 1999, 「わが国の運動会の歴史」吉見俊哉・白幡洋三郎・平田宗史・木村吉次・入江克己・紙透雅子『運動会と日本近代』青弓社, pp.85-128.
- 藤田武志, 2001, 「中学校部活動の機能に関する社会学的考察」『学校教育研究』第16号, pp.186-199.
- 藤田英典, 2005, 『義務教育を問い直す』ちくま新書.
- 鈎治雄, 2000, 「自己概念」日本特別活動学会編『キーワードで拓く新しい特別活動』東洋館出版社, pp.22-23
- 柳治男, 2005, 『〈学級〉の歴史学』講談社.
- 山田真紀, 1999, 「『学校行事』研究のレビューと今後の課題」『日本特別活動学会紀要』第7号, pp.90-102.
- 山田真紀, 2000, 「競争的行事における活動の編成形態とその機能」『日本特別活動学会紀要』第8号, pp.46-58.
- 吉見俊哉, 1999, 「ネーションの儀礼としての運動会」吉見俊哉・白幡洋三郎・平田宗史・木村吉次・入江克己・紙透雅子『運動会と日本近代』青弓社, pp.7-53.

〈キーワード〉

学校行事, 体育大会, 文化的階層, 自己概念

長谷川祐介 (高等教育研究所)
(2009. 9. 30 受理)

付表 中学生生活に関する因子分析結果

	学校適応	規律・ 学習重視	サブカル チャー重視	因子 4	因子 5
学校に通うことは楽しい	0.76	0.04	0.01	0.36	-0.06
自分の中学校のことが好きである	0.72	0.07	0.23	0.07	-0.08
自分の中学校をほこりに思う	0.70	0.09	0.22	-0.03	-0.11
自分のクラスにいて楽しい	0.57	0.06	0.08	0.44	-0.06
学校の授業は楽しい	0.57	0.32	0.01	-0.01	0.11
好きな先生が多い	0.47	0.42	0.11	-0.17	0.15
授業外で、先生によく話しかける	0.47	0.17	0.32	-0.14	0.06
学校の校則はきちんと守っている	0.16	0.63	-0.09	0.01	0.04
学校の宿題はかならずする	0.03	0.61	0.03	0.17	-0.03
チャイムが鳴ったら席につくようにしている	0.04	0.56	-0.05	0.02	0.15
先生の指導（注意など）はすなおに聞く	0.15	0.54	-0.11	-0.05	0.03
先生にさからうことがある	0.02	-0.49	0.44	-0.01	0.06
学校で禁止されている物をもってきている	-0.05	-0.49	0.21	0.04	0.12
家の人に言われなくても自分から進んで勉強する	0.12	0.45	0.09	0.06	-0.20
友だちといっしょに買い物によくでかける	0.10	0.01	0.72	0.14	0.02
同じクラスの友だちと遊びに行くことがよくある	0.13	0.04	0.55	0.22	0.04
いつも流行の服装をするようにしている	0.10	-0.06	0.53	0.15	-0.09
メールをよくする	0.09	-0.16	0.53	0.06	0.10
ちがう学校の友だちと遊びに行くことがよくある	0.10	-0.04	0.47	-0.01	-0.04
昼休みや休憩時間は友だちと一緒にいる	0.05	0.04	0.27	0.67	0.04
学校で友だちとおしゃべりすることが楽しい	0.23	0.08	0.25	0.55	0.05
テレビゲームをよくする	-0.09	-0.01	-0.27	0.03	0.49
授業中、授業と関係のない話をする	-0.01	-0.43	0.28	0.30	0.12
学校のテスト前になってもほとんど勉強しない	-0.09	-0.39	-0.10	-0.01	0.21
授業の内容を理解することができる	0.24	0.36	0.02	0.14	0.17
学校に行きたくないと思う日がある	-0.43	-0.19	0.04	-0.20	0.19
先生の指導に腹が立つことがある	-0.14	-0.38	0.40	0.06	0.18
マンガをよく読む	-0.06	0.02	0.02	0.11	0.43
インターネットをよくする	0.01	-0.01	0.26	-0.01	0.38
バラエティー番組をよくみる	0.13	-0.01	0.24	0.09	0.23
授業のとき、はずかしい思いをすることがある	0.00	-0.02	0.01	-0.16	0.30
先生の指導はきびしいと思う	-0.01	-0.09	0.16	0.04	0.18
因子寄与	3.15	3.08	2.72	1.47	1.09
因子寄与率	9.85	9.63	8.49	4.59	3.40
累積寄与率	9.85	19.48	27.96	32.55	35.95

※ 主因子法（バリマックス回転後の因子行列）

※ 因子負荷量0.45以上採用